講演「宗教学と世界文化」レジュメ

荒木美智雄

平成２０年２月２２日

於：関西福祉大学コミュニティホール

（１）今日世界各地から、多様な宗教と文化・社会に関する情報が毎日のように手元に届いている。

（２）世界の多様な社会・文化を理解するために、それぞれの生きた宗教の理解が重要・不可欠である。宗教の理解はそれぞれの宗教を生きている人々の精神的地平から進められることが大切。

（３）なぜならば、西洋近代の宗教概念は、世界の多様な宗教を理解するのにあまりに狭く、浅薄で偏りすぎている。

（４）たとえば、西洋近代の文化・宗教の把握を導いた概念のひとつ「フェティシズム」（物神崇拝）を取り上げてみる。「フェティシズム」はウィリアム・ピーツの分析によれば、１５世紀西アフリカの人種混合（現地の先住民、イスラム教徒、ユダヤ教徒，ポルトガル商人などからなる）の社会で、ポルトガル商人が先住民の胸を飾っていた黄金の「神像」を「フェイティッソ」と呼んだことに起源がある。
そこで用いられた言葉「フェイティッソ」（Man-made）は偶像崇拝を指し、ポルトガル商人（カトリック）の言葉であり、もともとは「ユダヤ教」で異教を非難するとき用いられる言葉であるが、ユダヤ・キリスト教の一神教的伝統をよく表す概念であっても、アフリカ先住民の宗教的世界をよく解説するものではない。

（５）この概念が１６世紀に西アフリカを訪れたドイツ人商人の旅行記によってドイツにもたらされ，啓蒙思想家、カント、ヘーゲルをはじめ多くの哲学の基本概念となったばかりでなく、歴史学・歴史観を支える進化論的視座、経済学、美学、心理学など人文社会諸科学の基礎概念となった。ここから派生した類語、アニミズム、ナチュリズム、多神教など、それぞれが興味深い歴史を持つ。たとえば、バルーフ・スピノーザの一神教、多神教、汎神教と、その後の展開。

（６）近代西洋諸国の植民地主義による世界支配にそのような概念は役立てられた。後れて近代化に取りかかった日本の近代史は、性急に西洋文化を導入しようとしたが、日本の宗教や世界各地の宗教を大切に扱っていない。

（７）その歴史を顧みるとき、私たちは日本の近代の学問と国家（人々）の歴史とともに、宗教の理解の問題と真正面から向き合うことを求められている。